

静岡新聞 2024 年 3 月 27 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

デジタル技術の進歩のスピードが速い。イノベーションが経済を牽引しているのだ。20世紀の偉大な経済学者シュンペーターは、イノベーションの本質は創造的破壊にあると指摘している。つまり、既存のビジネスや社会の仕組みを破壊することで、そこから新しいものが生まれてくるのだ。

実際、アップルやアマゾンなどの企業は、既存の多くのビジネスを破壊してきた。ただ、そうした旧来のやり方を破壊したからこそ、新たなものを生み出すこともできた。イノベーションという、進化とか新たなものを生み出すという面が強調されがちだが、既存のものを破壊するという面があることを認識する必要がある。

創造的破壊という面があるので、既存の大企業は破壊的なイノベーションには及び腰

革新の本質「創造的破壊」

になる。すでに確立した自分のビジネス基盤を壊すことになるようなイノベーションに力を入れることを躊躇するのだ。現実には米国の状況を見ると、デジタル革新を牽引しているのは、GAFAMと呼ばれるグーグル・アップル・フェイスブック・アマゾンなど、ベンチャー企業から急成長を遂げた企業ばかりである。

最近話題を呼んでいる半導体メーカーのエヌビディアなども含めて、米国の株価の大きな部分を占めたベンチャー発の企業が占めている。そしてこれらを追いかける形でさらに多くのベンチャー企業が生まれている。

日本経済が米国に比べて遅れてしまった大きな理由に、ベンチャー企業が少なかった点にある。少し前まで、東大のような大学の卒業生の大半は大企業などに就職していた。多くの学生がこぞってベンチャーに入ったり、自らがベンチャーを始めたりする、米国のスタンフォード大学やMIT(マサチューセッツ工科大学)とは大きく異なっていた。こうした彼我の違いが日米のベンチャーの違いであると言われてきた。

こうした状況は今、大きく変化しようとしている。東大で人工知能やバイオなどの最先端の分野を学ぶ学生に最も

人気のある就職先がベンチャーになっているのだ。自らベンチャーを始める人もいるし、将来性のあるベンチャーに飛び込む人も多い。また、自らは大学で研究者の道を志向しながら、同時にベンチャーにも関わる人も増えている。

若い人は世の中の動きに敏感である。イノベーションの流れを考えたら、ベンチャーに飛び込んだ方がより明るい未来が開けると考える人が増えているのだろう。もちろん、ベンチャーに飛び込むことはリスクも伴う。始めたベンチャーが破綻すれば職を失うことになる。

ただ、米国では、うまくいかなかったベンチャーから他のベンチャーに容易に転職できるようだ。一つのベンチャーで失敗した経験が市場で評価され、新しいベンチャーを立ち上げる人も多い。何度か失敗した人の方がベンチャーの経験が豊富であるという見方もある。

失敗を評価し、やり直しがきく社会。日本でベンチャーが広がるためには、そうした点も重要だ。実は、最近の東大生でベンチャーに飛び込む人が増えているのは、万が一失敗しても次があるという安心感があるからかもしれない。